

月刊

いじろのとも

第六卷

六月号

オウムを生み出すもの

ある評論家は
高度管理社会が
オウムを生み出す
と言う

そうではない

その高度管理社会をも
生み出す
個人主義と
合理主義と
の必然的結果としての
自己社会が
それを
生み出すのだ

ただひたすらに

くよくよと
思い煩わず
この今を
ただひたすらに
生きて行け

人生を考え直して

みたい人は（十八）

『老子』解説（十七）

今月号は第七十三章を取り上げます。

（第七十三章）敢えてすることに勇気があれば、殺したり、殺されたりすることになり、敢えてしないことに勇気があれば、活かしたり、活かされたりすることになります。この両者は、あるいは利益となり、あるいは損害となります。しかし、誰もその利害が何故そうなるのかわかりません。

でも、たとえ私たちが、それを知らなくても、天の法の網は、広く大きく、目は粗くても、そこからもれることはないのです。

この章は、抽象的で、かなり難しいように思えます。解釈が学者によって、まちまちです。皆さんも、何度か読み返して頂きたいと思います。そして、自分で考えてみて頂きたいのです。

どんなことを考えられましたか。まだ何も浮かんで来

ない方は、もう何度か読みなおして頂きたいと思います。

以下、私の考えたことを述べてみたいと思います。

多くの人のとって、この世で最も大切なものは、自分の「いのち」と自分の「おかね」ではないでしょうか。それは、いのちやおかねにまつわることわざや格言がとも沢山あるのをみても、明らかです。因みに、両方がからんだものだけをあげてみますと、例えば、次のようなものがあります。

後生大事や金欲しや、死んでも命のあるように。

死なぬものなら子一人、減らぬものなら金百両。

旅路の命は路用の金。

命は金で買われぬ。

千金の子は市に死せず。

本章で老子も、人間が最も関心の深い、活殺（生死）と利害とを例に挙げて、「物事が相対である」ことの教えを説いているのです。

私たちが、敢えて勇気をもって何かをなすとき、最終的には、命をかけなければならなくなってきました。いわゆる「命を張って」やり遂げる、ということなのです。そうすることで、もし、命を落としたりしますと、多くは失

敗であった、損をしたと一応は判断されます。人からは「馬鹿な奴よ」と物笑いの対象にされかねません。

逆に、敢えて勇氣をもって何かをなさないとき、私たちは命を落とさずにすむことができます。そうすれば、大切な命を永らえるわけですから、一応は成功であり、得をしたことになると思うのです。

具体的に言いますと、例えば、死刑のことを考えてみますと、死刑に勇氣をもって反対すれば、死刑囚の命は助かりますが、勇氣をもって実行すれば、命は終わってしまいます。

また、戦争のことを考えてみますと、どこまでも勇敢に敵と戦いますと、相手を殺すか、最後は自分が戦死するかになると思います。しかし、勇氣をもって兵役を拒否したり、突撃を拒否しますと、相手も殺しませんし、自分も死ぬことはありません。両方とも生きていられることになります。

では、この損得はどうなるのでしょうか。

死刑の場合についてみますと、死刑囚にとっては、勇氣をもって死刑に反対し、処刑を中止してもらえば得ですが、勇氣をもって実行されれば損になります。しかし、死刑という極刑をうけるほどですから、その死刑囚は、極悪なことをしているに違いないのだと思います。そう

しますと、その犯罪の被害者の人は、その囚人が死刑をまぬがれば「やられ損」だと感じるでしょうし、死刑になれば「仇を取る」ことができ、よかったと思うことでしょうか。

また、戦争の場合ですと、勇敢に敵を倒しますと、自分手柄をたてて得をしますが、敵はいのちを失って損をします。逆に、勇氣をもって兵役や突撃を拒否しますと、自国の兵力が弱まり、戦争に勝つという目的から言いますと、国は損をします。また、自分も非国民として皆から非難され、不名誉の誹（そし）りを受け、社会的に損をします。しかし、敵にとっては相手国が弱くなり、その分自国が相対的に強くなるわけですから、得をすることになると思うのです。

こうした戦争や死刑の損得に関して、実際に、死ぬことが損ではなく、かえって得だったと思える例が歴史にはいくつもあるように思います。私がすぐ思い出しますのは、ソクラテスとキリストのことです。二人とも死刑に処せられました。その死のためにかえって、二人とも歴史に名を残し、多くの人を救うことができたのではないかと思うのです。

このように、活殺（生死）が損になるのか得になるのかは、全く相対的なことなのです。生死のような人間に

とつて最も重要な避けえない出来事でも、個人を越えて、つまり個人の執らわれを捨てて、客観的、歴史的に大きな目で見れば、その人にとつても損になつたり得になつたりするのです。それは、損得そのものがこの世の中の相対的なことに属するからなのです。

人に勝つたり、負けたりすることも、人を死刑にしたり、されたりすることも、勿論、この世の相対なことに属します。それを、損と考えることも、得と考えることも、同様にまた、相対なことに属するのです。

偈に「しかし、誰もその利害が何故そうなるのか知りません。」とありますように、そうした相対なことが、歴史的にその人にどのような特定の意味をもち、どのような特定の利害をもつのかは、実は誰にも分からないのです。と言いますのは、そうした意味や利害は、その時々々の世の中の相対なことに依存して、変わってしまうからなのです。

では、世の中に何か変わらないものがあるのでしょうか。それは、この偈の言葉で言えば「天の法の網」ということになります。私のモデルで言いますと、「法を指して、より善く社会的であろうとすること」であるということになります。

こうした言葉で表現されていることが、時代の相対的

な価値によつて変わることはないのです。これらの言葉で表現される原理に適合した出来事の意味や損得は、普遍的に変わらないのです。それを理解できる人がいるかないかに関係なく、普遍的なのです。

もし、天の法の網が理解できず、それを無視するような人ばかりがこの世にあふれてきますと、人類は滅亡してしまふと思えます。しかし、それも天の法の網のうちにあると言えるのです。それは、人類が背負つた全体の業なのです。再び、どこかに新たな人類が誕生し、天の法の網も、新たに実現されてくると思います。

ですから、私たち、相対者であることを自覚できる人間としては、つまり、滅亡（死）することを自覚できる人間としては、精一杯天の法の網にかなうように行動し、滅亡をまぬかれるように、努力して行くことが大切なのです。そうすることで、生きることが充実し、幸せを感じる事ができるようになるからなのです。死を恐れなくてもよくなり、生きていて善かつたと、こころの底から感じる事ができるようになるからなのです。

これまで何度も説いてきましたように、天の法の網にかなつて、人さまのために何かを「させていただいてあげがとう」と感謝できるように生きることが、実は自身が真に幸せに生きる道でもあるのです。

自作随筆選

善いことをしたのに

仏教の中には、因果応報という考え方があります。善いことをすれば、善い結果がともない、悪いことをすれば、悪い結果がともなう、というものです。

ところで、こうした考え方からすれば、キリストやソクラテスは悪いことをしたから、死刑という悪い結果がともなったのか、という疑問が起こりそうです。

私は、キリストもソクラテスも、悪いことどころか善いことをしたと思うのですが、なのに普通では悪いことである死刑にされてしまいました。

これは、仏教の因果応報の教えに反しているのでしょうか。

それを検討するには、ある人にとって悪いこととは何かを考えてみるのが、一つはポイントになります。ソクラテスやキリストにとって、死は悪いことであつたのかどうか、ということですよ。

キリストについては、よく分かりませんが、ソクラテスについては、プラトンの書いた『ソクラテスの弁明』

の最後の部分によりますと、ソクラテスは陪審員に対して、「私は死ぬために、あなた方は生きるために、それぞれ出ていくが、どちらによいことが待ち受けているだろうか」と言い残しました。ということは、死が悪いこととは思っていなかったことを示しています。

おそらくキリストにとつても、死は悪いことではなかったのだと思います。

実は、こうした解脱した人たちにとっては、何が起つても、悪いことではないのです。日本の良寛さんも、「死ぬるときは死ぬるがよろしい、事故に遇うときは遇うがよろしい」と言いましたように、すべてのことは仏さまや神さまの思し召しのままなのです。

ですから、善いことをしていれば、善いことがともなうというのは、善いことをするように修行していれば、少なくとも何が起つても悪いこととは思わなくなってくる、つまり世間では一般には悪いこと、不幸なことと思われることでも、自分にとっては別段悪いことではないと思えるようになってくる、というわけです。まして、死後はどうなるか確かめようがないのですが、輪廻の考え方からしますと、そこでこそ世間で言うような善いことが待ち受けていると言えるのです。

実際に、ソクラテスもキリストも死刑にあまんじまし

だが、一人とも死後は聖人として、二千年を経た今でも、多くの人から崇められています。

ですから、仏教の「善因善果 悪因悪果」という教えは、キリストやソクラテスのような例があっても、間違っ
つてはいないのです。

自作詩短歌等選

知識は役立つか

知識（技術）は
うまく生きるためには
役に立つ

でも
善く生きるためには
役に立たない

生死を明らむる

この世にて
知るべきことは
ただ一つ

いっお迎えが
来ようとも
悔いなきことと
感ずべきこと

コミュニケーション

コミュニケーションは
エコーコミュニケーション

それは

こころを

響かせ合うことが

基礎になっていなければ

ならない

自己実現で得るもの

人間が

自己実現で

得るものは

こころに垢を

つけること

素直なこころ

無くすこと

したい性

いま

主体性は

ゆが抜けて

あれこれ

したい性

となつている

と言う

いのちの値打ち

人間は

生まれたら死ぬ

さだめとて

生命の値打ち

時間の値打ち

世間の承認

人間が
個人化すれば
するほどに
世間の承認
欲しくなる
自己の安定
得るために
他人の支持が
欠かせなくなる

人間は
世間に定位
してるから
世間が怖いと
感じける
世間の支持を
得られずに
自分の足場
失わぬかと

解脱の風化

今ほどに
解脱のことは
風化せし
時代なくして
宗教むなし

かけがえのない人間

人間は
人間にとり
かけがえの
無き存在と
今や知るべし

釈尊のことば（三六）

法句經解説

（一三三）荒々しいことばを言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだことばは苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

この偈には、難しいことばはありません。内容も言われている通りです。

ことばは、もともとは、人と人が情動や感情を通じ合うためのものでしたが、それが、人類の歴史が進み、文化が発展するにつれて、思考の道具となり、文字が発明され、知識を集積する手段としても使われるようになりました。

でも、ここで言っていることばは、もちろん、情動や感情、つまり、こころを通じ合うためのものです。ということは、ことばには、常にこころがこもっている、と言うことになります。

ですから、実際にことばが使われるときには、ことばの裏にどんなこころが隠されているのが、重要になってきます。いくら穏やかに言おうとも、そのことばの裏に冷たいこころや、非難・攻撃のこころがあれば、人は

そのころを感じ、そのことばに傷つきます。そして、ここでも述べていますように、報復を考えるようになっていくかもしれないのです。

ただ、人間関係が極めて親しい場合、そして、深い愛情で結ばれている場合には、厳しいことばで人を諭すことが必要なこともあります。しかし、そのためには、単なる非難や攻撃ではなくて、どこまでもその人のことを考えた、温かいところから発したものでなければならぬと思います。

(一三四)こわれた鐘のように、声をあげないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

鐘がこわれますと、響きがなくなり、単にものを叩いたときに出る音だけになります。そのように共鳴した大きな音(声)を出さなくなったような人の状態は、こころが安らかであることを反映していると言えるのです。人は、自分が思うとおりにならないときや、身体的に苦しいとき・痛いときや、眠いのに眠れないときや、空腹であるとき、つまり一般的に言えば、ある欲望や欲求が満たされないうでフラストレーション(欲求不満)に陥

っているときなどに、たとえ他者からの攻撃や非難がなくとも、あるいは、他者の行為には無関係に、つまり人間関係の結果としてではなく、自分自身で勝手に腹を立て、不機嫌になり、イライラします。そして、そうしたところの状態を表出して、人にあたります。人に怒り、人を罵(ののし)るのです。そうなりますと、周囲にいる人は、とても不愉快になってしまいます。

また、普段からところに何か満たされないものや不安を持っている人は、人のちよつとしたことばに情動が揺らぎます。周囲のささないことが、気にかかります。そして、そうしたところの動揺は、もし、もともとから他己が育つておらず、非協調的・主観的で、攻撃的な性格をしているような人であれば、すぐに他者に対して攻撃として表出されてしまうのです。

そうなりますと、もし二人の関係がほぼ対等の場合であれば、けんかが断えられません。理不尽にあたられますと、あたられた方としてはたまりませんから、言い返すことになりません。しかし、言い返せば言い返すほど、そうした人は、動揺が拡大していきます。その人自身の精神衛生はますます悪くなっていくのです。

こうした、二人の人間関係が対等の場合は、けんかになります。そうではないような場合、例えば、攻撃す

る側が親や教師や上司であるような場合には、攻撃される子や生徒や部下は言い返すことができないことが多いでしょうから、「災難」だといえます。

そうした親や教師や上司は、その資格を欠いた人と言えます。

でも、上司の場合はまだましです。二人は仕事で結ばれているわけですから、情動や感情を抜きにしても関係を保つことができますし、業績という割り切れる尺度をもつこともできるからです。おそらく、そんな上司の下では、仕事の能率も悪くなり業績があらなくなるでしょうから、自然に上司は変えられることになると思います。

ところが、親や教師の場合は、特に親の場合は変えられません。その親との関係を一生背負って生きていくべく運命づけられているのです。業という以外にありません。おそらく、親と同じ人間を再生産することになると思います。

親となつている人、なる人、教師の人、上司となつている人は、特にこの偈を味わって読んで頂きたいと思えます。もし、ことばを荒らげていることが、あるようでしたら、反省し、こころの制御ができるように、修行して頂きたいと思うのです。

(一三五) 牛飼いが棒をもって牛どもを牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものどもの寿命を駆り立てる。

牧場で牛が飼われるのを見たことのある人は、牛飼いが、牛を厩から牧場まで棒で駆り立てて行くのも見られたことがあると思います。

私たちは通常気づいていませんが、それと同じように、私たちが命のあるものは、老いと死によって、寿命を毎日、駆り立てられているのです。

普段、私たちは日常性に流されていて、自分の寿命が毎日一日ずつ縮まっているのを意識しません。生きていくとは思いますが、毎日、一日ずつ死んでいるとは思わないものです。

人間は生まれたら、せいぜい百歳まで生きれば長生きで、やがて死んでいきます。ですから、人間としての存在は、時間としてのみ意味をもつと言えるのです。分かったことですが、限られた時間を生きていられるだけだということですが。

ということは、時間をうまく使う人は、命を大切にしている、ということになります。

でも、時間をうまく使っていても、死はやがてやってきます。生を意識できる人間にとって、死は最大の苦しみです。死をめぐつて多くの人は、過ちを犯します。生の方から言いますと、自分の生を永らえる可能性を少しでも高めようとして、過ちを犯すのです。

ですから、この偈でいう死によって寿命を追い立てられているというのは、一日一日を大切に生きるべし、と教えているだけではないと思うのです。死によって追いつてられないようになりなさい、と教えているのではないかと思うのです。

既に、この法句経で解説した部分にも、このことを教えている部分がありました。たとえば、第三卷九月号の(二一)に「つとめ励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。つとめ励む人々は死ぬことが無い。怠りなまける人々は、死者のごとくである。」とありました。

また、第五卷十一月号の(一一〇)から(一一五)も同様のことを教えています。因みにその中の(一一四)では「不死の境地を見ないで百年生きるよりも、不死の境地を見て一日生きることのほうがすぐれている。」とありました。

どうか皆さん、自分の時間を、自分が不死の境地に至

るべく精進するために大切に使うではありませんか。ひたすら、そうなるうと精進して毎日を生きているとき、すでに人間は、無限に不死の境地に近づいているのです。

(一三六)しかし愚かな者は、悪い行ないしておきながら、気がつかない。浅はかな愚者は自分自身のことによって悩まされる。 - 火に焼きこがされた人のように。

火あぶりの刑に処せられた人が、足下の燃料に火が付ければ、燃え上がって、やがてじりじりと自分の身を焦がしながら死んでいくように、愚者は、自分のなした悪業に気づけず、その悪業の報いによって、丁度、火あぶりの刑に処せられた人のように、じりじりと身を焦がしながら死んでいく、と教えています。

私は、大学にいて、いつも感じることなのですが、殆ど例外なく、大多数の人が悪業をなしていますが、それに気づけません。その悪業を注意してあげますと、私がそうだといって自分を投影してきます。そして、逆に私を恨むのです。それが、まさしく哀れにも悪業を重ね、自らの身を焦がす燃料を蓄積していつているのですが、それに気付けないのです。

本当に、人間は業なものです。特に現代人は、自己を肥大させ、絶対化していますので、ますます、気付けなくなつてしまつていきます。そうした人にとって、悪いのは常に他者なのです。

そして、それは個人だけではありません。その集合体としての国家もそうなつていきます。例えば、それは、アメリカの、日本に対する原爆投下の正当化であり、日本の、アジア諸国に対する侵略戦争のやむを得ないこととする合理化であると思います。

いま、毎日のように、オウム真理教のニュースが、新聞の一面やテレビのトップを飾っていますが、この教団の犯罪行為に対するコメントを、新聞やテレビだけではなく、週刊誌や月間雑誌などで見ますが、本質的に確かな原因を指摘しているものはありません。

私は、この偈に述べてありますように、いま、現代人が他己を縮退させ、自己への執らわれを増やして、ますます、精神的に自己を社会に定位できなくなつて、自己の悪業に気付けなくなつてきているように思えるのです。多くの方がますます精神的な病理を深めているように思えるのです。

いま、何が正しいことなのか、生きていくうえで目指すべき価値が何なのか、多くの人に分からなくなつてし

まっています。そうした価値を見失い、エゴだけを肥大化させ、被害意識を過大にもつた（被害妄想の）人たちの多数（相対的ですので、二人でもいいわけです）であることが、正義になっているのです。そして、そこでは、殺人さえもが正当化されてしまうのです。それは、オウム真理教だけではなく、世界中の方々に起こる、様々な殺人テロを見ても明らかです。

彼らは、自己に執らわれて、自分が正しいことをしていると思つて、間違つたことをしているのですが、哀れにもそれに気付けません。積尊の時代には、個人レベル、あるいは、国家レベルでこうしたことが起こつても、それは地球の局所的なことで話が終わりました。しかし、現在は、地球は一つの運命共同体となっています。

オウム真理教はテロにサリンという毒ガスを使いましたが、いずれは核爆弾を使う予定であつたのではと思ひます。これは、何もオウムに限つたことではありません。方々で起こつている民族テロや宗教テロでは数のうえでそれほど多数ではなくても、核爆弾を製造したり、入手したりする可能性はありますし、それを使う可能性もあります。もし、そうなれば人類の滅亡をまねくことにつながります。自らの為した悪業に身を焦がして死んでいかなければならないのです。

後記

- 一、先日、高知県の障害児教育に関わる先生方に、障害児教育をどう考えるべきかと、私の開発した自閉症児を診断する検査（NSAT）の話を見せて頂きました。
- 二、明るい先生方が多く、高知県の障害児教育の前途が明るいものであると感じました。
- 三、ついでに、高知市にある古本屋を五軒まわって、かなり多くの古本を買ってきました。欲しいと思っていて、手に入らなかったものも、安く出ている、ありがたく買わせて頂きました。
- 四、このところ、毎日のようにオウム真理教のニュースがトップにきています。今日も、東京都の青島知事に対する爆弾郵便事件もオウムがやったと報じられています。青島知事が、オウムの宗教法人としての解散請求に積極的だということに対する報復だということですよ。
- 五、「釈尊のことば」でも書きましたように、いま、なぜオウムのような宗教教団ができてきたのか、的確に解説しているものはありません。私は、これは、現代人の精神病理そのものだ、と思うのです。
- 六、その精神病理の現れは、いたるところにあります。たとえば、これもニュースをにぎわしていますが、学校現場の荒廃です。徳島では特に、男性教師の女生徒に対

- する性的な非行が何年かおきに起きていますが、多くは生徒のいじめや非行、それに不登校です。
- 七、現代人は大勢としては、他己の成長が不十分で、人の痛みが分かりません。ところが、そういう自己社会のなかで、親の統制がきつく、自己の育っていない、自己と比較して言えば他己の方がよく育った人は、適応が著しく困難になります。そういう子は、いわゆる「人がよい」と言えますので、いじめやすい人間となります。また、自己の主体性が育っていませんから、学校へもいけなくなるのだと思うのです。
- 八、早く、他己を育てる教育を取り戻したいものです。

月刊 こころのとも 第六卷 六月号 (通巻 六十六号)	平成七年六月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと 沙門）中塚 善成</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	